

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(9) 平成12年9月15日

静岡の文化人(その1)

漢学者・詩人 山梨稲川と『稲川詩草』(S990/23)

稲川は明和8(1771)年8月4日庵原郡西方村(清水市)に生まれました。名は治憲、字は玄度。稲川の号は文化8(1811)年駿府稲川村(静岡市)に居を移したことに由ります。天明7(1787)年十七歳の時、江戸の荻生徂徠学派の陰山豊洲に入門しました。稲川は彼を生涯尊敬し、稲川の学問に中国の古典に遡り研究する古文辞学の影響が濃いのもこのためです。稲川の学問的交友には江戸の松崎謙堂、狩谷液斎、地元の桑原黙齋などの駿府地誌研究者や戸塚柳齋などの医師がいました。稲川は文化9(1826)年江戸で没し麻布香林院で荼毘に付された後、長男清臣が遺骨を奉じ帰郷し、駿府の宝泰寺に葬られました。享年56歳でした。

稲川の詩文は『稲川詩草』文政4(1821)刊(S990/23)に集約されています。これは駿府江川町の町人採撰亭柴崎直古(通称鉄屋十兵衛)の手により木活字にて刊行されたもので、全5冊に収められている詩は総計694首、その内訳は五言古詩88首、七言古詩33首、雑体古詩8首、五言絶句70首、六言絶句5首、七言絶句171首、五言律詩164首、五言排律45首、七言律詩106首となっています。『稲川詩草』のもとになった草稿群『山梨稲川詩稿』自筆本全22冊(K072/7)も当館に所蔵されています。未定稿なため重複しているものや詩題のみのものもありますが、約2800種の詩が収録されています。

稲川の漢詩は一般にはわかりづらい傾向にあり、その真価があまり理解されていませんでした。はじめに稲川の漢詩を高く評価したのは清国の俞曲園でした。彼は日本人の漢詩を編集した『東瀛詩選』(明治16(1883)年)に稲川の詩を68首(因みに徂徠は43首、新井白石は14首採られています)を選び、その中で「玄度(稲川)は文藻富麗、気韻高邁、東国詩人の中に在りて当に首に一指を屈すべし」と最大級の賛辞を送っています。それまで無名に近かった稲川はこれを機に一躍日本一の漢詩人と評価されるようになりました。稲川の研究書として戸塚柳齋の『稲川先生行状』とそれに拠った松崎謙堂の『稲川先生山梨君墓銘』(S289/ヤ2-2)や内藤湖南の『先哲の学問』などがあります。多くの稲川の資料を所蔵する県立葵文庫(現中央図書館の前身)では稲川没後百年に因み、館長貞松修蔵が葵文庫閉館間もない昭和2年5月15日に内藤湖南、新村出をはじめ全国の有志とはかり百年祭を挙行し、『稲川先生記念録』(289ヤ/2-5)を発行しました。さらに昭和4(1929)年6月『山梨稲川』全4巻(S080/5)を刊行しました。

庵原三山の一人で 甥の山梨鶴山の描いた『山梨稲川画像』(K072/23)には稲川の自賛を狩谷液斎が書き入れ、跋を松崎謙堂が添えているなど彼の交友の広さが窺われ、また稲川最晩年の姿を伝えるものとして貴重な資料であります。

【参考資料】

『東海道駿府城下』(下)(S222/145)

『江戸漢詩選2 儒者』岩波書店(919.5/133)

『山梨稲川画像』

(K072/23)